



家庭教師と隣の母娘

誘惑の個人授業

羽沢向一

挿絵／まひるの影郎

立ち読み版



Contents

目次

プロローグ	家庭教師、飛ぶ	4
第一章	家庭教師と飢えた未亡人	16
第二章	家庭教師とねだる教え娘	51
第三章	家庭教師と熟女と処女	84
第四章	家庭教師と女体ビエンナーレ	143
第五章	家庭教師と秘密のホテル	204
第六章	家庭教師と母娘並んで	256

登場人物

Characters

藤倉 優也

(ふじくら ゆうや)

東京のマンションで一人暮らしをする童貞の大学二年生。真面目な学生で、マンションの隣室の仁志乃茉莉に数学を教えている。

仁志乃 繭

(にしのみゆ)

優也の隣の部屋に住む三十八歳の未亡人。怪奇小説の人気作家。落ち着いた優しげな風貌には似つかわしくない、むっちりした体型の爆乳美熟女。

仁志乃 茉莉

(にしのみつり)

優也に家庭教師をしてもらっている十歳の高校一年生。繭の娘。優也に恋心を抱いている。母親似の聡明で端正な顔つきで、性感豊かなFカップの巨乳を持つ。



第一章 家庭教師と飢えた未亡人

ダイニングキッチンに、食欲を直撃する香りが満ちた。

優也は鼻の穴を広げて、魅惑の匂いを吸いこむ。

右腕にギプスをはめたままなので、上は黄色いランニングシャツ、下は片手でも穿きやすいゆったりした黒いハーフパンツに裸足という格好で、キッチンテーブルの前の自分の椅子に腰かけていた。

視線の先では、見慣れた自分のキッチンで、仁志乃母娘が昼ご飯の支度にいそしんでいる。

優也が退院して、マンションの自室にもどった日から、三度の食事はすべて繭と茉莉がやって来て、作ってくれるようになった。

茉莉の家庭教師をはじめてから、仁志乃家でごちそうになることは日常になっていったが、優也の自宅で食事を作ってもらうのはこの機会がはじめてだ。

左手は使えるから、スパーで惣菜やレトルト食品を買えば問題ない、と優也は言った。しかし繭と茉莉は、優也のお世話をすることを、父親と約束したと主張して聞かなかった。

今日の繭は夏らしい水色のノースリーブのワンピースに、愛用の白いエプロンを着

けて、海鮮中華丼を作っている。左手ではうまく箸を持ってない優也のために、必然的にスプーンで食べられるメニューになった。

繭の料理は一見するとたいして手間がかかっていないように思えるが、いつも優也は奥深い味付けに感心させられる。優也も一年以上自炊をしてきたが、とても作れない主婦の逸品だ。

茉莉は白いTシャツとダークブルーのショートパンツに、やはり愛用のレモン色のエプロンを着けて、サラダを作っている。巧みな包丁さばきで野菜を切り、皿にきれいに盛りつけていた。仲のいい親子らしく、母親から娘へ料理のテクニクがしっかりと伝授されているのが微笑ましい。

引っ越しのときに買った見慣れたテーブルも、並んでいるものが違うと、新鮮に見える。味付けも見栄えも適当な男子大学生の料理と、母娘の愛情がこもった一汁三菜では、まさに月とすっぽん。

ギプスが取れたら、繭さんに料理を教えてもらおう、と考えながら、優也は繭と茉莉がエプロンをはずして椅子に座るのを待った。

テーブルの対面に腰かけた母娘と口をそろえて、いただきますと告げる。
おいしい。

優也の口の中に、藤倉家とは違う家庭の味が満ちる。

昼食を終え、三人で食器をかたづけると、茉莉が名残惜しそうに言った。

「今日は午後から高校の友達の集まりがあるから、先生の晩ご飯は母さんにまかせね」

「茉莉ちゃん、今日もありがとう」

キッチンのわきのドアから茉莉が外へ出ていくと、繭が顔を優也のシャツの胸に近づけて、鼻をひくつかせた。

「昨日は、身体を洗ってないわね」

「臭います?」

「少しね。主婦の鼻は敏感なのよ」

「左手だけで身体を拭くのは、けっこう面倒なんですよ」

右腕のギプスのために、風呂には入れない。優也はタオルを濡らして、裸の身体を拭くだけですましていた。料理だけでなく掃除も洗濯も、繭と茉莉に手伝ってもらっているが、こればかりは優也ひとりですらなくてはならない。

「そうよね。とくに背中を拭くのは難しいわね。そう思って、今日はわたしが優也くんの身体をきれいにしてあげる」

「えっ!? 今、なんて」

自分の耳が信じられず、聞き返した。繭に身体を拭いてもらうためには、当然ながら繭の前で裸になる。それどころか、繭の手が自分の裸体に触る。幼児のころは別として、優也はそんな経験をしたことがない。

優也は、まだ童貞だ。

キスも未経験。

今も昔もクラスの女子に嫌われたことはない。性欲も人並みにある。積極的に彼女を作らなくちゃならないという意識がなかったただけだ。

「わたしが優也くんの身体をきれいにしてあげる、と言ったのよ」

優也は左手を繭に握られて、強く引っぱられる。勢いにつられて、キッチンから奥の寝室へ連れていかれた。壁際の箆笥の中に、洗濯した服やタオルが入っているから、寝室に来るのは不思議ではない。

しかし次の繭の動作に、優也は驚きと困惑の声をあげた。

「えっ、ええ？」

繭は両手を自分の背後にまわして、ワンピースの背中ファスナーを下げる。

すっとワンピースが落下して、繭の素足をかこむ水色の輪と化した。

優也は繭と一年あまりのつきあいだが、繭の身体を直接目にしたことはなかった。衣服の上からでも、繭が豊満なグラマーということはわかるから、つつい裸体を妄想したこともある。そのたびに、なにを考えているんだと反省しきりだった。

現実に見えたのは、純白の下着ではなかった。

着衣を捨てた仁志乃繭の肉体を飾るのは、なめらかな光沢のある白い水着。

三十八歳の熟女にふさわしい、おとなしいデザインではない。

(大きい！ 小さい！)

目を見張る優也が、口の中で矛盾する驚嘆の言葉をつぶやく。

(すぐく大きい巨乳だ！ すぐく小さいビキニだ！)

推定FあるいはGカップの豊満な乳房は、驚異的な迫力で優也を圧倒する。

艶めかしい巨乳の前面に貼りついた白い水着は、面積が小さいだけでなく、とてもきわどい。

ビキニトップの二つの白い正三角形は、左右から盛大にやわらかそうな肉をはみ出させている。三角形そのものも、内側からの乳房の圧力で、今にも破れそうな印象だ。三角形の頂点から伸びるストラップは、頼りなさそうな白い紐で、満々とした乳肉に少し食いこんでいる。

下半身も、へその下に小さな白い逆三角形があるだけ。ボトムサイドは紐になっ
ていて、今にもウエストからずり落ちそうに思える。

二十代前半の若い女が、こういう大胆な水着でプールサイドやビーチを闊歩するのは、日本では珍しいが、不思議はない。繭の年齢でこのビキニはありえない、と優也は常識的に考えていた。

しかし、目の前に立つ繭のビキニ姿はすばらしい。ミスマッチな小さい水着のおかげで、むしろ熟した大人の女の魅力が強調されている。

三つの白い三角形に飾られた女体は、見事な巨乳にふさわしい豊かな量感がある。

けっして太っているわけではない。ウエストのなめらかなくびれから、むっちりした左右の太腿へ至るラインは絶妙な美しさだ。

「どうかしら。新しく買った水着よ」

繭の問いに、優也はかすれた声を絞り出した。

「え、ええ。すてきです……」

水辺のふさわしい場所ならともかく、自分の寝室で、よく知っている美女がきわどい水着姿になっているという状況に、どう反応していいのか、わからない。

「後ろはどう？」

熟女の全身が、ゆっくりとまわりはじめる。

白い紐のストラップが走る背中が見え、ビキニのボトムに包まれた尻が、優也の目に映った。

優也の頭の中に、また同じ言葉が響く。

(大きい！ 小さい！)

繭の尻も、乳房に負けず劣らず、大迫力だ。乳房以上にみっちり肉がつまった重量を感じさせる。それでいて尻たぶは高く持ち上がり、鈍重な印象はない。

二回転して、繭の身体が正面を向いて止まると、優也の視線はまたバストに集中する。回転スピードはゆっくりだったのに、左右の乳球が弾んで、ビキニのトップがずれそうに思えた。

「さあ、優也くんも脱いで！」

「あの、ぼくは」

返答に窮している間に、繭の手によって優也の両肩からランニングシャツが引き抜かれる。

「繭さん！」

ようやく声が出たときには、もう優也の上半身を裸にされていた。

「待ってください。こんなことは、ああっ！」

ランニングを奪われたことで、裾に隠れていた黒いハーフパンツの前面が現れる。そこには、見事なほどに高々とテントが張られていた。優也は繭のビキニ姿に意識を奪われて、自分がすでに勃起していることに、自分の目で見るまで気づきもしなかったのだ。

「こ、これは……」

ペニスに血流が集中しても当然の状況は、あきらかに繭に責任がある。しかし優也は繭の身体を見て肉棒を硬直させたことに、罪悪感を覚えてしまう。

「すみません、繭さん。こんなことは」

ふいに目の前の繭の顔つきが変化した。

目が丸く見開かれ、唇が息苦しそうにパクパクと開閉する。

「ご、ごめんなさい。わたし、自分を偽っていたの」

「ええっ!？」

「経験豊富な大人の女が、若い男の子を誘惑するシチュエーションを演じるつもりだったけれど、本当は違うわ。わたしは夫だけしか、男の人を知らない。健治さんが亡くなってからは、この十年の間、男の人とキスしたことも、男の人の身体に触ったこともないわ!」

ひと息にまくしたてると、繭は大きく息を吐いて、力が抜けたように床に両膝をついた。

想像を超える急展開に、優也は啞然として、乳房が左右に揺れる様子を見つめる。繭は息をついてから、顔を上げた。優也の顔を見上げるのではなく、内側から突き上げられるハーフパンツのつっぱりの頂点を凝視する。

「最初は、本当に、優也くんに、茉莉の家庭教師をしてほしかっただけなのよ。軽い気持ちだったわ。でも健治さんが死んでから、自分の家の中に男の人が長い間いるのははじめてで、部屋に優也くんの匂いが残って。あの、優也くんは、外見は健治さんとは似ていないわ。でも空気が似ているの」

優也は、仁志乃家のアルバムを見せてもらっていた。今より若い繭や幼い茉莉といっしょに写る男性の、幸せそうな顔を目にした。仁志乃健治は出版社の営業部に勤めていたそうで、大学の文学部の先生たちにも共通する知的で真面目な容貌だ。優也本人には、自分のなかが似ているのかはわからない。

「一年以上もうちに来てくれていたから、部屋だけでなく、私の身体にまで、優也くんの匂いが染みついて、もうがまんできなくなつたの。だから、お願い！」

「は、はい！」

優也は困惑しながらも、繭が口にするお願いの内容を考えてしまう。妄想に反応して、ハーフパンツのテントの頂点の位置が、より高くなる。下半身の動きを、繭の瞳が追う。

「優也くんのおちんちんを見せてください」

繭は両手を畳について、頭を下げた。

優也はいよいよ呆然としてしまう。

(ど、土下座してる！ 繭さんが、すごいこと言つて土下座してるっ！) 額を畳につけたまま、熟女が年下の男子大学生に同じ言葉をくりかえす。

「お願いよ。優也くんのおちんちんを見せてください」

「土下座なんて、やめてください」

「見せてくれるの！」

迫真の勢いに気圧されて、優也はうなずくしかなかった。

「見せます！ ぼくなんかのでもいいなら、いくらでも見てください」

「ありがとうございます！」

畳から離れた繭の両手が、すばやく優也のハーフパンツの前のボタンをつまみでは

ずした。あつという間に、パンツとトランクスが同時に引き下ろされる。

解放された勃起ペニスが、勢いよく跳ね上がり、自身の裸の腹を打った。優也の分身は、本人も見ることがないサイズに膨張している。表面に浮き上がった静脈が今にも破裂して、濃厚な血液を噴きそうだ。

優也は自身の性器と、繭の顔を、ひとつの視界に捉えた。生まれてはじめて、ペニスを家族でもない女に見られるのは、男でも恥ずかしい。だがそれ以上に、あこがれの美女の顔が、自分のそそり勃つ男根のすぐ前にある光景は、たまらなく興奮させられる。

「あああ、優也くん」

と、繭は熱してかすれた声音で男根を呼んだ。二つのキラキラと輝く瞳は、首を振る亀頭をじつと見据える。

「優也くんに触っていいかしら」

繭の指が、畳に下ろしたままのハーフパンツとトランクスを激しく握りしめる。両手が勝手にペニスに伸びようとするのを、懸命に押しとどめているようだ。

「ああ、わたしに、触っていいと言ってください」

ここまで来たら、優也に拒否できるわけがない。燃え盛る下半身が、絶対に断らせない。

「触っていいです！ 今すぐ、繭さんに触ってほしいです！」

「ありがとうございます！」

礼の言葉が終わる前に両手が跳ね上がり、十本のしなやかな指がガチガチに硬い肉幹にからみつく。まるでたいせつな宝物を護り、慈しむように、左右の手でペニスを包みこんだ。

「うおっ！」

「はああ」

優也の驚嘆の声と、繭のせつない歓喜の吐息が、同時にあふれた。

ペニスの表面に、ただ女の指が触れているだけなのに、優也は自慰よりもはるかに豊かな心地よさを感じる。

繭は指を男のシンボルに触れさせているだけなのに、猛烈な熱量が全身に流れこんでくるのを意識する。

（気持ちいい。女の人の指って、こんなに気持ちいいんだ！）

（熱い。あああ、男の人のココは、これほど熱かったのかわ！）

繭はこのまま男の熱い肉を握っているだけで、全身が蕩けてしまう思いがした。十年ぶりに触れる男の肉塊から感じるエネルギーは、それほど新鮮で強烈だ。

小鼻をひくつかせて若い男の香りを嗅ぎながら、顔を赤く色づいた亀頭へ寄せる。右の頬を、亀頭の細い裂け目が刻まれた先端へと触れさせた。

ジュッ！ という頬肉が焼ける音が、鼓膜に響く。もちろん実際には存在しない、

繭の頭の中だけで鳴った音色。苦痛ではなく、歓喜の音色だ。

「あああ、いい……」

肉幹をよりしつかりと握り、頬をすりつける。

「ああ、繭さん！ それっ、くうっ、気持ちいいっ！」

たまらず、優也は喜びの声をほとばしらせる。繭の顔が上下左右に動くたびに、すべすべの肌とやわらかい肉で敏感な亀頭をこすられて、はじめての快感が続々とあふれ出す。

アダルトビデオで女優がフェラチオをする場面は何度も見たが、頬ずりするところは見ることがない。触覚だけでなく視覚にも未知の刺激は、童貞大学生をたちまち追いつめた。裸の全身が震え、尻と太腿の筋肉がギリギリと収縮する。

繭の顔に射精してしまうことを恐れて、叫びを寝室に響かせる。

「だめだ、繭さん！ もう、出るっ！」

「飲ませてください！」

繭も声を高くする。

「ええっ!？」

驚く優也の返事を待たずに、繭が亀頭に唇をつけた。キスのやわらかい感触で、敏感な表面をくすぐられる。予想されたことなのに、優也は自分の目を疑った。

(ええええっ、フェラチオ!?)

チュッチュツとかわいい音色を奏でて、小鳥がといばむのにも似た亀頭へのキスを連続させる。

「おおふっ」

優也は腰が蕩けそうになり、あわてて両脚をふんばった。いよいよ射精欲求が高まる亀頭を、繭が口の中に入れる。指や頬とも違うぬるぬるした温かい感触に包まれて、優也は声に出してしまう。

「繭さんがフェラチオしてる！」

「はい。フェラチオをさせてください」

口に亀頭を含んだまま、繭が答える。言葉とともに舌が動き、ペニスが新鮮な快感に痺れる。

「繭さん、すごい！」

優也が見下ろす先で、よく知る美貌が、自分の男性器を口に入れている。現実とは思えない光景だ。亀頭を舐められる直接の快感だけでなく、頬や顎の動きでペニスを愛撫している様子が視覚の悦びとなった。

優也が見たAV女優たちのフェラチオは、飢えた獣のように、ことさら大きな音をたててペニスを貪っていた。対照的に、繭は本当にたいせつなものを愛でるように、静かに舌を動かし、やさしく舐めてくれる。

亀頭を啜える繭の瞳がとろとろと潤み、白い頬が赤く染まっていく。唇がふるふる

と動き、くぐもった声が漏れた。

「ああ、優也くんのおちんちん、おいしい。とつてもおいしいです。おちんちん大好きなの」

エロ漫画の台詞じみた言葉だが、繭の表情に、優也は真実を見出した。

(繭さんは、本気でぼくのおいしいと感じてるんだ！)

そう確信すると、やさしいフェラチオの快感が倍增する。繭の粘つく舌の動きが、いつそう鋭敏に感じられて、亀頭が熱したキャンディのように溶けそうな思いがした。

「あうう、繭さん、危ないです！ 本当に、今すぐ出るからっ！」

「優也くん、出して」

言葉とともに、繭は亀頭を強く吸引した。

「んちゅっんん」

「おううっ！」

繭が口内で鳴らすセクシーな音と、優也の咆哮が重なる。優也の裸身が棒立ちになり、熱い塊が腹の底からせり上がってくる。これまで数えきれないほどしたオナニーでは一度も体験のない、未知の射精の感覚だ。

映像ではなく、生きている女に向かって精液を放出することを、切実に実感する。

「出します！ 繭さんに出しますっ！」

ダムの決壊さながらに、精巢から白い奔流が猛烈な勢いで尿道を走った。亀頭を震

わせ、鈴口から爆発的に噴出する。

あふれる精液で繭の口の中が満たされ、艶めかしいうめきがこぼれた。

「あうんっ！」

同時に、優也の全身が脱力する。繭の唇と両手の指の間から亀頭がすっぽ抜けて、畳に裸の尻もちをつく。

「はああああ……」

優也は無意識に大きな息を吐いて、くたくたとへたりこんだ。

だらしない姿を見せる優也の前で、繭は無意識に両手を膝の間についた。口の中の精液を、ワインのテイスティングさながらに舌の上で転がし、口内の粘膜すべてで味わう。

（ああ、これ……これだわ……）

十年ぶりに口内に沁みる粘つきと温かさが、全身の神経をピリピリと目覚めさせていく。

もつと精液を味わっていたという願望と、精液を飲みこんで自分の体内へ収めたという欲望が、繭の中でせめぎ合う。

優也に声をかけられなければ、もつと悩んでいただろう。

「あの、繭さん」

「はひ」

繭はとっさに返事をして、急いで精液を飲み下した。喉の動きが、優也にもよくわかる。

「飲んでる！ ぼくが出したのを、繭さんが飲んでる！」

こくりとうなずき、今度は明瞭な言葉を返す。

「はい。飲ませていただきました、んんっ！」

繭の顔の筋肉がキュッと引きつり、下半身が畳から浮き上がった。

「はああああああ……」

両手と両膝で支えた胴体が小刻みに震えて、白いビキニの尻が左右に踊る。足の指が反りかえり、手の指が畳の目を搔いた。

表情がゆるみ、力なく開いた口から、わななく声が漏れる。

「……………イク」

「えっ！」

目の前で起こった衝撃的光景に胸打たれて、優也は普通なら口にもできないことを問いただした。

「もしかして、繭さん、イッたんですか!？」

「はあ……」

繭はまた大きく息をつき、持ち上がった尻を畳に降ろして、両肩を下げた。それからゆっくりと答える。

「……はい。恥ずかしいけれど、イッチャった。軽くだけど」

驚愕の告白が、熟女にしてはかわい口調で語られる。

優也の心臓がまた高鳴り、股間で射精したばかりのペニスがビクンと動く。もし蘭が予定した通りに、大人の女の余裕を見せつけていたら、優也はなにも考えずに飛びかかって、押し倒していただろう。

蘭の態度はとても魅力的だが、同時に優也に疑問をいだかせる。

「あの、蘭さん、質問していいですか」

「はい、なんでもどうぞ」

「その、どうして、ぼくがなにもしていないのに、えーと、イッたんですか？」

「それは、優也くんの精液を飲ませていただいたから。ああ、生身の男の人にイカせてもらうのは、十年ぶり」

「ぼくのを飲んだだけで!! そんなことが、あるんですか!」

蘭の美貌に、うっとりとした笑みが浮かぶ。

「わたしはそういう女なのよ。精液を飲むだけで果ててしまう、とても恥ずかしくて淫らな身体よ」

「そんな」

「健治さんに、そう調教されたわ」

優也はまさに言葉を失った。呆然として、精液を飲んだ余韻に輝く妖艶な美貌を凝

視する。

「調教といっても、誤解しないでね。健治さんは、酷いことはなにもしなかったわ。健治さんは若かったけれど、とても女性経験の豊富な人だった。もちろん、わたしとつきあってからには、わたしだけを愛してくれたわ。そうしてキスの経験もなかったわたしの身体を、ていねいに開発してくれたのよ。おかげで、わたしの身体はとても淫らになったの」

優也が意味を理解する時間を与えるように、繭は言葉をいったん切った。そして少し身体を前にずらして、顔を男子大学生へ近づける。

「もうひとつ、誤解しないでね。わたしの身体は淫らだけれど、妻の貞操はきちんとしてきたのよ。健治さんが生きていた間も、死んだ後も、他の男の手を握ることさえ考えられなかったわ」

また間を置き、さらに優也に近づく。今にも唇同士が触れ合いそうな距離。

「優也くんに出会うまでは」

本人の説明を聞いても、優也はよく理解できなかった。ただ眼前にある甘く熟した女の顔を見つめていると、自然に言葉が出る。

「キスしていいですか」

「はい！ キスしてください。あ、ちょっと待って」

パネが跳ねるように繭が立ち上がり、パタパタと寝室を横切って、バスルームへ入

った。繭がこれほど敏捷に動くのを、優也ははじめて見る。

「なに？」

首をかしげていると、すぐに繭がもどってきた。再び、優也の前にすすつと正座する。

「なにをしたんですか？」

「口をすすいできたの。精液が残っていると、いやだと思って」

微笑む繭の唇に、優也は唇を押しつけた。勢いがありすぎて、少し痛かったが、気にならない。

「んっ」

「うん」

優也は自分の唇に触れる唇のやわらかさに、全身を昂らせる。

(キスしてる！ 繭さんとキスしてるぞ！ ファーストキスだ！)

ついさつき繭にフェラチオをされて精液を飲まれたのに、ファーストキスのほうが、心がより大きく躍った。

優也はキスをしたまま、無意識に膝立ちになる。

繭も正座の腰を浮かせた。

優也は繭の身体を抱こうとしたが、ギプスで固めた右手は動かせない。しかたなく左手だけを背中中の素肌にまわして、強く抱きしめる。

「んんん……」

「うっうんん」

繭も両腕を、優也の背中にまわす。

優也の胸に、ビキニトップのつるつるの感触が押しつけられ、巨乳のたわわな弾力を感じた。

先に舌を伸ばしたのは、優也のほうだった。胸に感じる乳房の圧力が、童貞男子を大胆にする。突き出した舌先で、自分に密着する繭の唇を上下に割る。

優也が舌を相手の口の中に入れると、はじめて繭の舌が動いた。自分から亀頭を啜えることを望んだ熟女とは思えない、おずおずと遠慮した動きで、繭は優也の舌と触れ合う。

ねちっ。

と、口と口の間で、あえかな音色が鳴る。

優也が味わったことのないぬるぬるした触感が、舌先から浸透した。

(舌に触ってる！ 繭さんの舌、ねっとりしてる！)

もっと味わいたい。燃え盛る欲望に駆られて、舌をくねらせ、繭の舌をしゃぶる。悩ましく粘つく音色が、つきつきと口内から直接脳へと伝わった。

さらに舌音に加えて、繭の喘ぎも聞こえる。

「んっ、うっんん、んあ……」

優也は呼吸するのも忘れて、甘い果実のような舌を吸いつづけた。

「ふわあっ！」

長い舌同士の抱擁の末に息苦しくなり、ようやく口を離す。二人の唇の間に、唾液の透明な糸が伸びて、ふつつつと切れる。

繭は自分の唇をそっと舐めて、甘い声を投げかけた。

「胸を触ってください」

優也の返事を待たずに、両手を背中へまわし、ストラップのホックをはずした。白い三角形のカップを胸から離して、寝室の隅へ放り投げる。

解放された乳房は、自由を謳歌するようにふるると揺れて、優也へ向かってどつと迫った。小さいビキニのトップをはずしたからといって、たいして乳房のサイズが変化するはずがない。それでも優也の目には、ポリウムがひとまわり大きくなったように映る。

「大きい……」

はじめて生で見せつけられる巨乳の大迫力に、優也は思わずたじろぎ、あたりまえの単語しか出ない。

満々と張りつめた乳房は、自身の重さでやや位置を下げた。それもまた、たまらなく艶めかしく感じる。色白の乳球の先端には、淡い桜色の乳輪が描かれ、中心から肉の筒がそそり勃つ。

繭の乳首は、バストサイズにふさわしく、長さも太さも立派。小指の第一関節の先ほどもあり、先端を斜め上の天井へ向かってつんと伸ばしている。

自身の胸を見下ろし、繭は頬を染めた。

「ああ、恥ずかしいわ。優也くんにかきされて、乳首が勃っちゃってる」

羞恥心に反応するように、乳首がふるふると震えて見える。

(本当に、女の人の乳首は勃起するんだ！)

優也は感銘を受け、ギプスを忘れて、両手を巨乳へ向けて伸ばそうとした。当然、右手は揺れるだけで、左手のみが繭の右乳房に当たる。

やわらかい。はじめて感じる、未知のやわらかさだ。もつと感じたくて、強く握力をこめると、指先が白い乳肉の中に沈む。

繭が美貌を歪めて、甘くつぶやく。

「お願い。やさしく触って」

「は、はい」

興奮で、優也の声がかすれる。一度は乳肉に埋まった指を引き出し、指と手のひらを乳房の曲面に這わせた。なめらかな乳肌の上を、指が滑り、さわさわとなでさする。

「はああ、気持ちいい。そうやって胸をなでられるのが好き」

うっとりとする繭の表情と声音が、優也の全身を熱くさせる。左手に感じる乳房の肌触りが、たまらなく心地よい。股間に血流がそそがれ、勃起の勢いが射精する前よ

りも激しくなった。

「あっ」

赤熱する亀頭が、そつと両手で包まれる。膝立ちの腰がビクンと動き、敏感な部分に快感が流れた。

繭は手を動かさない。ペニスを強く握るのでもなく、ただ手のひらでやさしく挟むだけ。まるで幼い女兒が心を安らげるために、たいせつな人形を抱くような触り方だ。優也が漠然とイメージしていた『熟女との濃厚なセックス』とは大きくはずれている。触れ合うほどに、繭が不思議な存在に思えてくる。その不思議さが、優也を惹きつける。

使えない右手のかわりに、優也は顔を左の乳房に押し当てた。目も鼻も口も、やわらかい乳肉に密着してふさがれる。しかし鼻先にだけ、他とは異なる硬い感触が当たった。想像を超える発見に、優也は胸の内で喝采をあげる。

（乳首だ！ 勃起してる乳首は、こんな硬いんだ！）

すぐさま感動と驚嘆の源泉を、口に啜えた。唇で乳首を挟み、先端を舌で舐める。

「あひっ！」

今までより高い嬌声が、優也の耳に飛びこんできた。亀頭を包む手のひらの圧力が、やや強くなる。

肉筒をしゃぶりながら視線を上へ向けると、繭と目が合った。不思議な液体を流し

たように、黒い瞳がとろとろと潤んでいる。

「乳首を舐められて、あんん、とつても気持ちいい」

しっとりした歓喜の声を耳にそがれて、優也は鼓膜を濡らされる思いがする。強い欲望が、入道雲のように湧き起こる。

（繭さんをもつと感じさせたい。繭さんの胸をもつと感じたい！）

優也は左手の指で、右の勃起乳首をつまんだ。強い力を入れないように注意しながら、親指と人差し指で桜色の筒を上下にこする。

「やつ、やはああ、乳首が両方とも、気持ちいいのっ！」

繭は意識して自分の快感を口に出す。はじめて女を愛撫する優也に、きちんと女を悦ばせていることを伝えたい。自分が、優也の手で歓喜していることをちゃんと教えてあげたい。

「すてきよ、優也くん。そのまま、乳首の愛撫をつづけて」

「ふわい！」

優也は乳首を咥えたまま返事をする。声がしこりきつた女の急所を細かく振動させて、さらに繭の胸に愉悅の波を起こす。

「あつ、はひいつ、たまらない！」

繭本人の予想を超える悦楽が、乳首から乳房の奥へ伝わり、全身へ拡散していく。未亡人になってから今日までの十年の間に、男に触れたことはないが、自慰はしてき



た。自分の手で乳首を愛撫するのと、男に愛されるのでは、肉体の悦びの大きさがまったく違うことに驚かされる。

記憶に強く残る夫の技巧に比べれば、優也の指も口も単調だ。それでも繭は身も心も女の喜悅に浸りきった。

「あつ、はあああつ、イッチャウ！」

嘘偽りのないエクスタシーの言葉が、優也へ向けられる。亀頭を包む両手が、キュッと握る。

優也は乳首を舐めしやぶりながら、繭の甘い言葉を聞きもらすまいと耳をそばだてた。

「イクっ！ 優也くんは乳首を愛されて、イク」

声が高くなり、かすれる。同時に、亀頭を強く握りしめる。

「イクん、んっ、あああああああ………」

繭の膝立ちの身体が、床に落ちた。白いビキニボトムに包まれた股間が、畳の目にこすられる。優也の唇と指から剥がされた巨乳が、大きく上下に弾んだ。

「……………んんん、ああ、すてきよ。優也くんはイカされたわ」

「胸だけしか触っていないのに!!」

信じられないという顔つきになる優也へ、繭はやさしく微笑みかける。

「言ったでしょう。わたしは夫に調教された、淫らで貞淑な女なのよ。健治さんが亡

くなくなってから眠っていた性感が、優也くんのおかげでどんどん覚醒しているわ」

小説家らしい形容の言葉に、優也は感心させられる。

「それに、女は男と違って、何度でもイケるわ。最初は軽くイって、だんだん深く、大きなエクスタシーになっていくのよ。だから」

繭の両手が、優也の肩にそつと置かれた。そのまま肩を押されて、背後へ身体を傾かせられる。優也は意図を理解できないまま、繭に操られて、背中を畳につけて横たわった。

優也の胴体を、立ち上がった繭がまたぐ。

「うあ」

優也が見上げる視線の先に、白いビキニが密着する熟女の股間がある。その上には豊満な下乳があり、さらに上気した美貌がうつむいて、甘美な視線を降らせてきた。

「正直に言うと、わたしは男の人の上に乗るのは得意ではないのよ。でも今の優也くんは右腕を動かせないから、わたしが上になったほうがいいと思うの」

「そ、そうですね」

「わたしの一番感じるところをイカせて」

「そ、それって」

「見てください。繭のおマ○コ」

優也はまたもや絶句させられる。自分の耳が信じられない。繭のような知的な美女

が、こんな卑語は絶対に口にはしない、と考えていた。

「女がオマ○コなんて単語を使うのはおかしい、と優也くんは思うのかしら。わたしも昔はそう思っていたけれど、健治さんに使うように教えられたわ。ただし、ここぞというときだけに使わないと効果がないとも言われた。今がそのときだと思うの」

繭の両手の指が、ボトムの左右のサイドをつまんだ。

「優也くん、繭のオマ○コを見てほしいの」

「見たい！ 今すぐ、繭さんの……」

逆に優也のほうが、年上の美女に向かって、あらゆる卑語を口に出すことがためらわれた。

(ぼくもズバツと言ったほうが、いいかも)

そう思っても、できなかった。

「繭さんのを見せてください」

「はい。喜んで」

繭の足が前に動き、優也の顔の左右をまたぐ。膝が曲がり、白いビキニが顔の前に降りてくる。

鼻息がかかるほどの位置で、降下が停止した。優也の視界を、左右の内腿と白いビキニが埋めつくす。想像もしたことのない扇情的な光景に、優也の下半身が勝手に波打ち、ふくれあがった亀頭がビクビクと跳ねる。

「見て」

もう一度告げて、繭はボトムスの両サイドのホックを同時にはずし、水着を股間から抜き取って投げ捨てる。

優也の目の前に、生まれてはじめて見る女の秘部が差し出される。といってもふつくと盛り上がる恥丘の中心に刻まれた縦の亀裂は、ぴっちり閉じたままで、本当の秘密は明かされない。

それでも、優也の頭の中で自らの喝采が轟く。

(これが、女の人の！ ああ、それに！)

恥丘の向こうに、繊細で精密な皺がすぼまっている。その愛らしいたたずまいに、優也は目を奪われた。

(繭さんのお尻の穴だ！ 女の人の肛門は、こんなにかわいいんだ)

とても自分の尻にも同じ器官があるとは思えない。肛門に夢中になる優也の耳に、繭の声が響いた。

「見て、繭のおマ○コの中」

繭の両手が自身の腹をすべり落ちて、内腿の間に入った。四本の人差し指と中指が左右から肉唇をつまみ、そつと開く。

「うわっ！」

恥丘の中心が広がると同時に、優也のまぶたを大きく見開いた顔に、透明な液体が

ポタポタと降りそそぐ。思わず目を閉じると、はじめて嗅ぐ芳醇な匂いが、鼻腔をみつしりと満たす。匂いだけで、頭の中が真っ赤に染まった。

あらためてまぶたを開くと、眼前で桃色に濡れ光る肉の花が華麗に咲き誇っている。熟女の秘密の花は、童貞大学生の想像をはるかに超えて、精緻で複雑な造形だ。ぷりぷりした肉の襷も、ぷっくりとふくらんだクリトリスも、そしてとろとろと体液を沁み出させる小さな穴も、見ているだけで男の本能をわしづかみにされる。

「きれいだ！ 繭さんのココは、すごくきれいです！」

優也の称賛の声と激しく見つめる視線を、女性器に浴びて、繭はぶるつと腰をくねらせる。

「お願い。わたしのオマ○コを舐めて。優也くんの口で、わたしのオマ○コをイカせてください！」

懇願しながら、繭は右手を肉唇から離して、背後へ伸ばし、亀頭を握りしめた。指と手のひらを男の体熱で焼かれて、さらに腰が自然とうねりだす。

「あああ、オマ○コを舐められている間に、おちんちんを触っていても、いいかしら」
「はいっ！」

亀頭から伝わる快感の痺れに応えるように、優也は思いつきり勢いをつけて首をもたげて、繭の股間に顔を突っこんだ。

指を離しても開いたままの濡れ花の内側に、鼻と唇が潜りこむ。悩ましい香りがよ

り強烈になり、口内に未知の味が染みわたる。

(甘い！)

と、優也は思う。

現実には甘いわけではないが、優也の脳がそう判断する。

(とっても甘いよ！)

優也が感謝の思いをいだと同時に、繭の驚嘆の叫びが寢室に響く。

「あああつ、すごいわっ！」

十年ぶりに女の園に感じる男は、炎のように激しく熱い。乳房を愛撫されたとき以上に、自分の身体が男との接触到飢えていたと思ひ知らされる。自分の目で見えなくても、肉襜や膣の入口が歓喜に沸いて、蠢いているのがわかる。

(ああ、優也くんにも、とんでもなくいやらしい女だと思われてしまうわ)

今さらそんなことを考えるのは、われながらおかしいと感じるが、恥ずかしさに身体の奥底がカッと熱くなる。その高熱が、さらに繭の性感を鋭敏にする。艶めかしい嬌声が自然と高くなる。

「あひいっ、たまらないの！」

優也は自らの情熱に浮かされて舌を伸ばし、肉襜の狭間を上下に舐めまわした。舌の表面とやわらかい女肉がこすれ合い、粘つく摩擦音を鳴らす。

優也の舌の動きに合わせて、繭の腰が踊り、肉花を若い顔へ押しつけていく。熟女

の欲望が、声になって絞り出された。

「クリトリスを、繭のクリトリスを舐めてください！」

即座に優也は、膨張した肉の粒に吸いつく。とがらせた唇で挟みこみ、強く吸引して、舌でつついた。

「はひっいっ！」

繭の裸身が大きくのけぞる。倒れそうになる身体を、右手に握る硬い男根で無意識に支えた。

「くんっ！」

亀頭を強く握られて、優也も女性器に顔を埋めたまま、うめき声を発する。反射的に腰が高くせり上がり、クリトリスをいっそう強く吸いこんだ。

「ふあああつ！ ダメっ！ 気持ちよすぎるう！」

叫びながら、繭は助けを求めるように右手の指を蠢かせ、意識しないまま亀頭を強く刺激する。

精液を飲むエクスタシーと巨乳絶頂の連続で、繭の全身に官能のエネルギーが充満していた。十年ぶりに女の急所をしゃぶられ、陰核を強く吸われて、わずかな時間でエネルギーが爆発する。

「イッチャウ！ 優也くんに舐められて、イッチャウの！」

空いている左手が、優也の頭をなでまわし、髪をクシヤクシヤにする。

「イクッ!!」

繭の手から力が抜けて、亀頭から離れた。身体が背後に傾き、優也の胴体の上に倒れる。優也の裸身の上で、繭の汗に濡れた裸体が何度も痙攣した。

優也は全身に感じる熟女の体重を、心地よく感じた。まるで生きた掛布団のよう。このままじっとして女体の重みを堪能したい、という欲望も頭をかすめたが、下半身で渦巻くマグマが許してくれない。左手で繭の脇腹をさすって、声をかけてみる。

「あの、繭さん、大丈夫ですか？ ぼくは、その、まだ」

「ごめんなさい」

繭の身体がむくりと起き上がり、また優也の胴体をまたぐ位置を変えた。

今度は腰の位置。今にも暴発しそうな勃起ペニスの上に、唾液に濡れた女性器が来る。その光景を目にしただけで、優也の全身に電流が走った。

「優也くんのおちんちんを、わたしにオマ○コに挿入してください」

そうお願いする繭の美貌は、女の欲望をありありと映し出していた。まるで空腹の犬が餌を前にして、主人の命令を待っているように見える。そんな露骨な顔でありながら、品のある魅力は少しも失われていない。

優也は声にならない歓声をあげる。

（本当の意味で、童貞を卒業するときに来たんだ！）

「繭さん！ ぼくとセックスしてくださいっ！」

優也が声を大にした直後に、別の聞き慣れた音色が響いた。

玄関のインターホンのチャイムだ。

そしてスピーカーから、もつと聞き慣れた声が流れる。

「先生、もどつてきちゃいました。友達の家族に大変なことがあつて、集会は途中で中止になったんです」

茉莉の声を聞いて、優也と繭は無言で顔を見合わせる。一瞬後にあわてて裸身を離れた。二人ともに筆筒から出したタオルで急いで汗を拭き、猛烈なスピードで脱ぎ散らかした服を着直す。

どうにか見た目を整えると、優也は玄関のドアを開けた。夏の日差しの中に、茉莉が額に汗を浮かべて立っている。

「おかえり、茉莉ちゃん」

優也は顔をやや引きつらせて、家族を迎えるように言った。

視線は茉莉へ向けながら、意識は自分の下半身に集中している。穿き直したハーフパンツとトランクスの内側では、童貞を脱する寸前でおあずけをくらった男根が、今もやるかたないエネルギーを保持したまま、不満のうめきをあげている。自分でもどうにもならない肉欲のフラストレーションを、茉莉に気づかれはしないかと気が気ではない。

部屋に入った茉莉の背中を、優也はひやひやしながらがめていると、背後に立つ

繭が耳もとでそつとささやいた。

「明日、つづきをしましょう。明日こそ、優也くんのはじめてが欲しいわ」

「はい！ よろしくお願いします！」

優也は期待に小声を弾ませた。

「だから、明日のそのときまで、オナニーをしないでね」

繭のささやきは、さらに甘さを増量する。年上美女の声で、耳孔に『オナニー』という言葉を流しこまれて、トランクスの中でますますペニスが暴れまわった。

自分の分身の喚き声を無視して、優也はうなずいた。

「は、はい。約束します。オナニーは絶対にしません！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>